

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720064

研究課題名(和文)近代日本の植民地映画における音楽の象徴性の比較的研究

研究課題名(英文)Comparative historical research on the representation of music in colonial films in early modern Japan

研究代表者

葛西 周(KASAI, Amane)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：00584161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本の植民地で主として戦中に製作・上映された映画の聴覚的要素を対象とし、当時の映画音楽がいかに創作・採用されていたか、それらにどのような機能が求められていたかを解明しようと試みた。予備調査として国内外のフィルム現存状況の調査と新聞雑誌の映画音楽関連記事のデータベース化をおこない、それらを踏まえて作品内容と言説の分析を進めた。

結果として、植民地で製作された映画のための音楽の委嘱状況、既存の楽曲を新作映画に付す場合の選曲に見られる傾向、映画音楽に関する製作側の理念、当時の文化統制の方針との関連などが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study deals with auditory elements in films produced or screened in the former Japanese colonies, to examine their backgrounds and functions during the World War II. As a preliminary research, the state of remaining films has been confirmed, while articles on film music in newspapers and magazines have been compiled into a database.

The analysis of such texts and discourses clarifies (1) commissions to compose music for films newly made in the colonies, (2) trends in adopting existing musical pieces for them, (3) filmmakers' policies on music, and (4) influences from cultural censorship on film music.

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学 映画研究 植民地表象 日本 台湾 朝鮮 満洲 国際情報交換

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始以前に、申請者は戦前のメディア・イベントにおける音楽創作活動・演奏活動から事例を抽出することにより、日本における音楽の近代化の一側面を明らかにした。主に、平時の近代日本国家が西洋やアジア諸国と対峙しながら形成した概念や価値観をつきとめたと言える。しかし、日本が植民地においてどのような文化戦略を実施し、そこではいかに音楽が国家のイメージ表象のツールとして機能したか、という問題は十分に扱うことができなかった。そこで本研究では、①時代を昭和初期まで広げて研究対象を映画に絞り、②日本の植民地主義という視点から「音楽」表象を考察することとした。とりわけ、日清・日露戦争および第二次世界大戦という特殊な状況下の事例を扱い、これまでの研究成果と比較しながら、平時に内地で築かれた概念や価値観がいかに強化されたか、もしくは変容したかを問うこととした。

(2) 日本の旧植民地で製作・上映された映画に関する研究は、殊に台湾に関して、三澤真美恵(『「帝国」と「祖国」とのはざま——植民地期台湾映画人の交渉と越境——』2010)や田村志津枝(『はじめに映画があった——植民地台湾と日本——』2000)などの研究成果が挙げられるが、いずれも映画製作に拘わった監督ら製作側や役者の活動、あるいは彼らの意図と国策との相互作用ないし相克状態に焦点を合わせたものであり、音楽への言及はほとんど見られない。

一方、日本の植民地における音楽の研究は、これまで唱歌教育に関して大いに進展を遂げてきた(劉麟玉『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』2005、岡部芳広『植民地台湾における公学校唱歌教育』2007ほか)。たしかに植民地主義は教育政策に顕著にみられるが、学校教育の現場ばかりが国

民教化の場ではない。映画という一種の娯楽を通じた教化活動を研究対象とすることで、日常におけるゆるやかな文化的統制をも俯瞰することが可能になると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は映画における聴覚的要素を主な調査対象とし、①植民地の映画音楽に委ねられた国家をめぐるイメージの象徴性およびその表象戦略と、②映画に用いられた音楽を通じた、植民地における自文化/異文化表象との二点を明らかにすることを目的とした。植民地の事例について資料調査を進め、これまでに研究してきた日本国内の事例との比較を試みることで、映画そしてその音楽において国家より促されたイメージの認識・再構築・発信が、その場で表象された音楽へいかに反映されたかを解明することを狙いとした。

## 3. 研究の方法

映画ないし映画音楽作品そのものの内容分析と、製作の基盤となった社会的状況および理論や思想を把握するための活字資料の調査の二方向からアプローチした。すなわち、①対象地域で製作された映画および対象地域を舞台として日本で製作された映画をめぐって、どのような音楽がいかなる文脈のもと創作され演奏されていたかを、地域ごとに時系列に即して比較・分析した。②さらに、同時期の新聞・雑誌などで、音楽というものが植民地と結びついてどのように描かれていたかを見ることで、それらの背景を補完した。

調査範囲としては、日本が清より台湾を割譲された1895年から、朝鮮統治期(1910年韓国併合～1945年領有権放棄)および満州国時期(1932年建国～1945年崩壊)、敗戦に伴い植民地の領有権を放棄した1945年までを網羅する19世紀後半から20世紀前半に製

作された映画および出版された活字資料を対象とした。時代や地域をまたがって展開された植民地主義における文化政策の側面を解き明かすには、単一の事例研究に留まらず、複数の異なる事例を比較する方法が有効であるため、本研究は多様な事例を射程に入れることとした。

資料分析に先立つ作業として、『映画雑誌』、『キネマ旬報』、『音楽評論』、『レコード音楽』といった映画雑誌および音楽雑誌における映画音楽へ言及した記事のデータベース化を進めた。続いて、『台湾日日新報』、『京城日報』、『朝日新聞 外地版』、『満州日日新聞』、『満州日報』、『大連新聞』など、植民地において発行された一般新聞雑誌の映画音楽関連記事、ならびに内地で発行された新聞雑誌を調査し、映画音楽や植民地の音楽に関する記事を抽出した。

日本国内で所蔵されている資料のほか、旧植民地所蔵資料に関する予備調査と、そのうち書籍やDVD等として刊行されている資料の収集・調査も並行しておこなった。また、予備調査を踏まえて韓国で資料収集・確認作業を実施した。具体的には、韓国映像資料院所蔵で植民地期映画フィルムおよび製作時の資料の調査、国立国楽院で当該時期の音楽に関する資料の調査にあたり、韓国国立中央図書館で先行研究に該当すると思われる論文等を確認した。台湾では国立伝統藝術中心台湾音楽館、国家電影資料館、国家図書館、国立台湾図書館、新竹市文化局影像博物館において映画および映画音楽に関する資料調査を進め、蔡瑞月舞踏研究社では蔡瑞月の舞踊が収録されている貴重フィルムを閲覧するとともに、蔡瑞月文化基金会理事長であり蔡瑞月の直弟子であった蕭渥廷氏と面会し、台湾のモダンダンスで用いられる音楽について聞き取り調査を実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 満洲に関しては、満映には同時録音設備がなかったため、撮影時に自然音を収録するのではなく、固有の映画音楽が創作されてBGMとして付される習慣があった。それにしたがって、内地の作曲家を招聘し、現地視察を経た作品の創作を求める例が見られた。外地の様子を具体的に伝える記録映画の映像と、外地での滞在経験からインスピレーションを受けてそれを抽象化し表現した音楽が結びつき、満映の設備的な制限の影響もあって奇しくもプロパガンダ的役割を果たしていたことが事例によって示された。

(2) 台湾に関しては、国立台湾歴史博物館所蔵の植民地期映画フィルム168本に関して、それぞれの映画に音楽が付されているかどうかを確認した上で、使用されていた音楽の傾向を整理し、音楽と映像との間に何らかの機能的連関が見られるか、フィルムの内容によって使われる音楽の種類や用法に差異があるか等について調査を実施した。全体を通じて見ると、フィルムでBGMとして用いられている楽曲の作曲年代はまちまちであり、クラシックの有名曲もあれば、同時代作曲家の作品も含まれていた。また、作曲家の出身国も広範にわたり、当該時期の国家間の国際関係は映画音楽を選択する上で重視されていなかったことがわかった。教練のシーンで軍楽・軍歌を用いる、というような安易に想像できるパターンはあまり確認されず、むしろ場面との関連性を見出せないようなクラシック曲が使われている例が顕著に見られた。

(3) 韓国に関しては、前述の映像資料院で当該時期の新聞雑誌における映画関連記事を整理し刊行するプロジェクトをおこなっているためその成果が参照可能であり、また現地調査でもフィルムの現存状況や韓国での

先行研究の動向について把握できたため、予備調査は完了している。言語の問題等で分析の成果を本研究期間中に公開するには至らなかったため、研究を継続して今後発表する所存である。

(4) 映画研究は映画学・映画史の分野はもちろん、カルチュラル・スタディーズやメディア論、社会学などの領域から学際的に進められてきたが、音楽学からのアプローチは極めて少なく、作曲家研究の一端として展開されがち傾向にあった。しかし、戦前・戦中期に音楽がメディアとしての機能を担った多様な文脈を明らかにする上で、映画は重要な研究対象である。本研究は作曲家で事例を絞らずに、映画の中の聴覚的要素を広く扱うことで、それらの音楽が持つ背景や、諸ジャンルの中での位置づけ、内地で担ってきた機能との比較など、より具体性かつ専門性に富んだ視点を提示できたため、音楽学と映画研究の双方の分野に寄与するものと言えよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 葛西 周 「プロパガンダ映画の音——植民地期台湾の映画フィルムにおける聴覚的要素についての予備的研究——」、『中国語中国文化』、査読有、No.12、2015、pp.48-66

② 葛西 周 “Sound of Post-War Japan: Representation of “Japaneseness” through Music at Expo ’70.” (本文英語)、*Trans-Asia Popular Music Studies*、査読無、2015、pp.5-16

③ 葛西 周 「日本の初期トーキー映画にみる音楽ジャンル観の変遷」、『日中音楽比較研究国際学術会議論文集』、査読無、No.10、2013、pp.355-363

④ 葛西 周 “Music and Tourism in Early

Modern Japan: Hot Spring Resorts as Tourists' Musical Community.” (本文英語)、*Soundtracks Conference: Music, Tourism and Travel*、査読無、2012、pp.1-12

[学会発表] (計13件)

① 葛西 周 「植民地期台湾の文化映画で用いられた音楽に関する考察」、「東アジア植民地期映画フィルム史料の多角的な研究モデル構築」定例研究会、2014年10月3日、日本大学(東京都・世田谷区)

② 葛西 周 “On the Borderline: How to Identify the Genre of Music.” (英語による発表)、*Inter-Asia Popular Music Studies Conference*、No.4、2014年8月9日、チェンマイ(タイ)

③ 葛西 周 “Purified Music by Cultural Imperialists: Representation of “Decadent Music” in Japan-occupied Manchuria.” (英語による発表)、*Biennial Conference of the East Asian Regional Association of International Musicological Society*、No.2、2013年10月18日、台北市(台湾)

④ 葛西 周 「日本の初期トーキー映画にみる音楽ジャンル観の変遷」、第10回日中音楽比較研究国際学術会議、No.10、2013年3月28日、東京藝術大学(東京都・台東区)

⑤ 葛西 周 「日中戦争期の音楽にみる「大陸」表象——満洲国民音楽の模索と音楽ジャンル観の関連から——」、日中戦争史研究会、No.11、2012年9月15日、愛知大学(愛知県・名古屋市)

[図書] (計2件)

① 葛西 周 他(馬場 毅編)『多角的視点から見た日中戦争——政治・経済・軍事・文化・民族の相克——』、集広舎、2015、pp.175-196

② 葛西 周 『近代日本の祝祭空間における「音楽」表象』、コンテンツワークス、2012、177pp.

[その他] (計2件)

① 葛西 周「地域横断的な「国民楽派」の議論に向けて——日本における関連用語の混乱を例に——」、『京都大学地域研究総合情報センターディスカッション・ペーパー』、査読無、No.49、2015、pp.9-12

② 葛西 周「音楽にみる境界線のポリティクス——博覧会における「植民地」の展示から——」、『日本のポピュラー音楽をどうとらえるか3——文化装置としての東アジア——』、査読無、2014、pp.41-53

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

葛西 周 (KASAI, Amane)

東京芸術大学・音楽学部・講師

研究者番号：00584161